2016年（平成28年）2月16日（旧1月9日）火曜日（日刊）

夕刊 東奥日報

東奥日報社　〒030－0180　青森市第二問屋町3丁目1番89号
©東奥日報社　2016

青函ひと物語 7

北海道新幹線3月26日開業

圏域の味覚 世界に発信

食を通した街づくり活動を実践

田村　昌弘さん(45)　函館市在住、弘前大卒

今月6日夜、弘前市の土手町コミュニティパークはたくさんの市民らでにぎわった。食べ飲み歩きイベント「弘前バル街」に、函館市の料理人ら7人で出店。北海道南地方の食材を使った料理を提供するとともに、間近に迫る北海道新幹線開業をアピールした。

「バル街」は2004年に函館市から始まった。いまでは同様の取り組みが全国に広がっている。11年から開催の弘前バル街には、函館チームの一員として毎年参加。「市民に愛される催しとして定着してきた」と盛況ぶりに頬が緩む。

バル街のほか、国内外のトップシェフが函館に集う「世界料理学会」の運営など、仲間とともに食を通した街づくりに取り組む。青函地域の料理人連携の仕掛け人でもある。「まず自分たちが楽しむこと」が、活動のモットーだ。

幼いころ、夏休みの家族旅行は決まって、青函連絡船で青森市・浅虫温泉へ。「子どものころから青森を身近に感じていた」。1988（昭和63）年3月、高校2年のとき、函館発の連絡船最終便「羊蹄丸」に乗った。「時代の節目を見届けたかった」。弘前大学に入学し、函館との行き来は青函トンネルに変わった。

大学では弘前市茂森町を研究フィールドにし、ねぷた祭りや消防団の活動にも関わった。「地域社会の研究を通じて、とにかく街の人に育ててもらった」という。大学時代の経験が、現在の活動の原点だ。

大学を卒業し、地元に戻り函館市役所に勤務した後も、弘前との交流は続いた。独立後のいまは、両市を結ぶコーディネート役が仕事の一つだ。

北海道新幹線開業でさらなる青函交流が期待されるが「そう簡単なことではない」と指摘。その上で「根っこは人との関わり合い。肩書だけの付き合いや、軒先だけを見るのではだめ。もっと懐に入り込み、相手のことを知らなければ、新しいものは生まれない」。函館、弘前に加え青森の3市のバル街関係者で続いている交流は「優等生かもしれない」と胸を張る。

食をきっかけに青函圏をもっと盛り上げたいとの思いは強い。料理人が料理哲学や素材、風土、調理方法などを発表する世界料理学会は09年から1年半に1回開催。本県のシェフも調理に加わるなど舞台裏を支えている。近年は、料理人をはじめ食の関係者らが集う千人規模のコンベンションに成長した。「この催しを函館だけでなく、津軽海峡圏域のものとして世界に発信していきたい」

（月舘慎司）

（毎週火曜日掲載）

食を通した青函活性化に取り組んでいる田村さん。弘前バル街で道南の味を提供した＝弘前市

＜たむら・まさひろ　1971年函館市生まれ。弘前大卒。「函館西部地区バル街」「世界料理学会 in HAKODATE」の運営に携わる。函館市のオフィス「オリゾンテ」代表＞